D 生徒指導に関する研究

Ⅰ．附中から附高への6か年の学習成績変化の追跡（その5）

――成績変動関連図表を出発点とする中学での指導の試み――

戸苅　進　冨田　昇　三谷みちゑ　宮田　学　織田　長繁　渥味　久子

本年度の研究のあらまし

生涯教育のコアとしての重大な意義をもつ中等教育段階の6か年を，一人一人の生徒に，それぞれ力一杯に充実したものとして送らせるための指導の客観的な基礎資料作りと，さらにそれに基づく早期の軌道修正的な指導の実証的研究をねらい，戸苅を中心に昭和44年度より取り組んできた本研究も，5年目となった。

本年度は，4人の担任グループに，読書指導の面から織田，カウンセリングの面から渥味（養護）の参加も得，中学2年の生徒90名を対象に，教育学部の大橋助教授を中心とした御指導・御助言も得て，昨年度までの基礎資料に基づく積極的な指導に着手した。

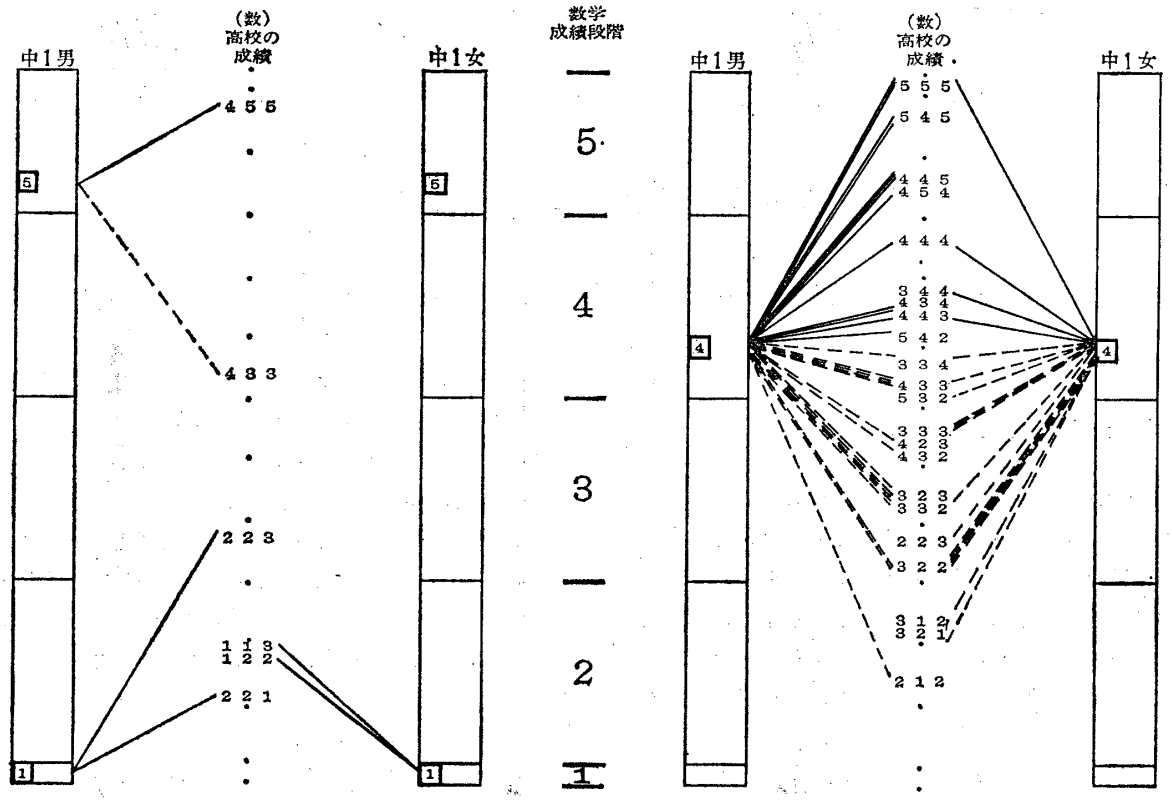
研究の細部にわたっては全員が適宜協力し合って進めていることは勿論であるが，大きな方向での分担としては大体次のようになっている。先づ大綱と，それに密接な関係をもっている資料の総合整理の面は戸苅が，データのコンピューターによる処理およびその方法の開発については冨田が担当。また本研究の中心である生徒指導の面ではH.Rを中心とした生活面からの指導には冨田・三谷が主となり，戸苅・宮田がそれを助ける形で，一方教科の学習指導面からは，三谷が国語，冨田が数学，宮田が英語，そして戸苅は理科を分担している。さらに渥味はカウンセラーとして，以上の一般指導からはみ出したり，はみ出しそうになってゆく者を主に引き受け，一方読書指導の角度からは三谷が，図書部長の織田と協力して担当している。

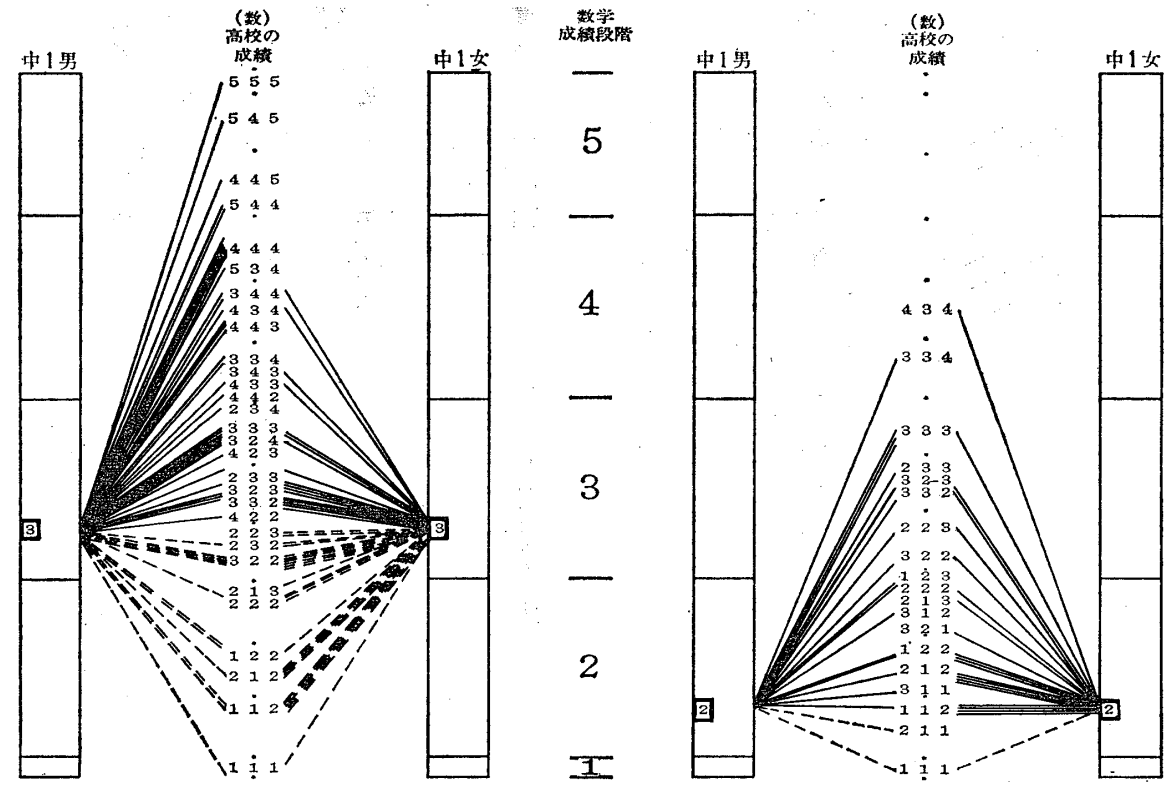
このような取り組みは，未だ本年度に開始したばかりであるので，その効果が云々できる段階でないことはいうまでもないことであるので，最も早くある程度の見通しが得られる面でも来年度あたりがやっとという状態，詳細は総て本紀要の次の集以降に発表させて頂きたいと思うが，ここで，以上のような分担で，どのような方向・どのような観点での指導をしているかまたしようとしているかを明らかにしておくことは，責任もあり，また必要なことでもあると考えるので，次にこれらを簡潔に箇条書きにして付記しておく。

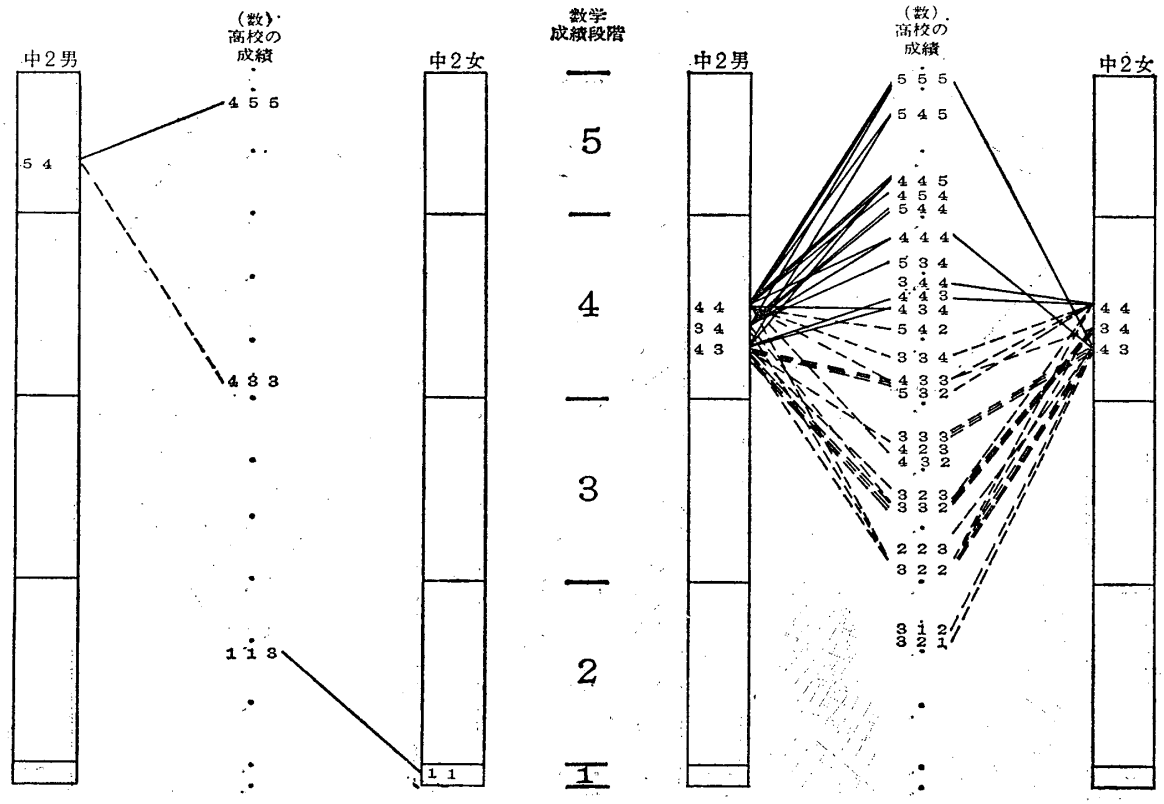
○　受動的にではなく，能動的に，自分の足を地につけ，自分の力で歩む努力を。
○　自分だけで学習し，人を出し抜くのではなく，学習の仲間作りを大切に，共に伸びる構えを。
○　単なる記憶でなく，理解し，考える方向で。
○　判っていることの限界を明確にしてゆく努力。
○　判らないことを，具体的に問題として凝集させ，その解決に積極的に取り組む態度を。
○　目先だけの学習でなく，既往にさかのぼり，未来への見通しを意識した，大型の学習を。
○　教科書を通し，習科書の外へ目を向ける努力。
○　教科相互の関連を積極的に追求し，教科の間の壁を取り除き教科間の溝を埋めてゆく努力。
○　知識理解の対象としての静的な対象としての概念認識から，流動し進化してゆく過程内に位置づけられた動的なヴェクトルとしての概念認識へ。（概念探究過程の重視）

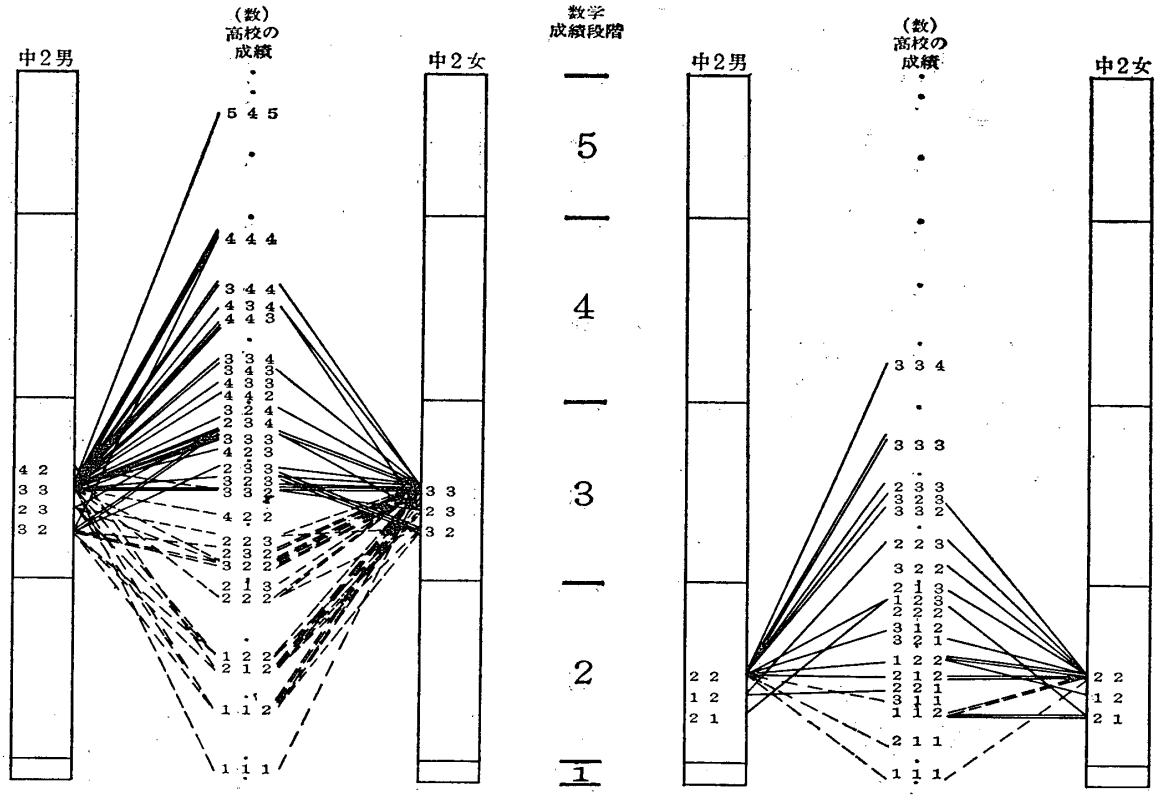
以上のような多角的な方向と観点からの指導を志向するに当って，その基礎的な資料として，特に昨年度全科総合のものについては報告した成績変動の中高の関連図表はやはり相当に有効なものであり，特に，各教科別のものは，きめの細かい学習指導には不可欠のものであることが明確になってきたので，今年度の報告には，国・社・数・理・英の5教科のすべてを発表したいものと考えていたが，数か月前からの予想外の印刷費の高騰から，我々に許された頁数の範囲ではその半分だけでも無理という情勢，まことに残念ながら今回は特に中学段階での成績の振り分けが決定的になってゆくもののうちで，さらに教科としての特異な傾向の明確に現われてくる数・英について発表する。

なお上述の関連図表は相当に有効であることは事実であるが，われわれの研究目的のための資料として，これだけでは勿論不充なので，結果は勿論，それぞれについてのコメントを付す余地さえなく，甚だ不本意であるが，本年度我々が試みてみて，上記の欠を補うに足ると判断することのできた諸テストは，ソシオメトリー，学習意欲診断テスト（LMT），臨床的性格診断検査（CDPA）であることを付言しておく。

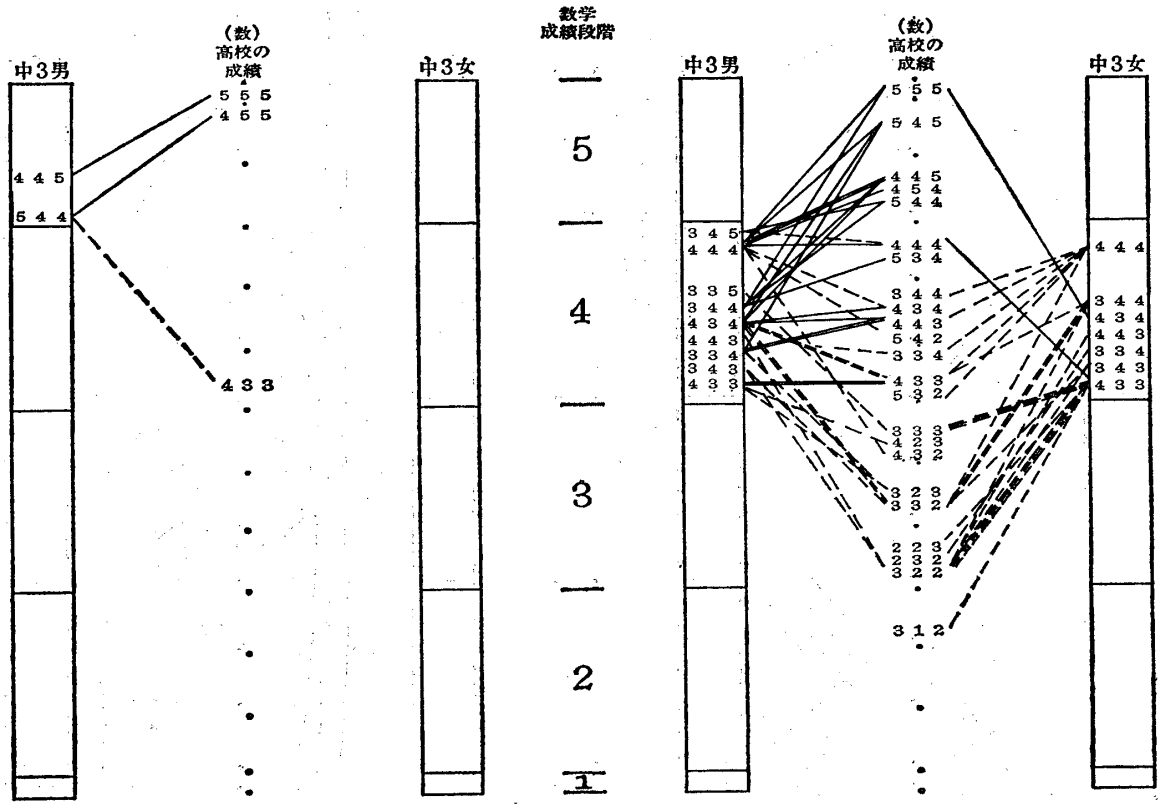

中1男
(数)
高校の
成績
中1女
数学
成績段階
5
4
3
2
1
455
433
223
113
122
221
555
545
445
454
444
344
434
443
542
334
433
532
333
423
432
323
332
223
322
312
321
212

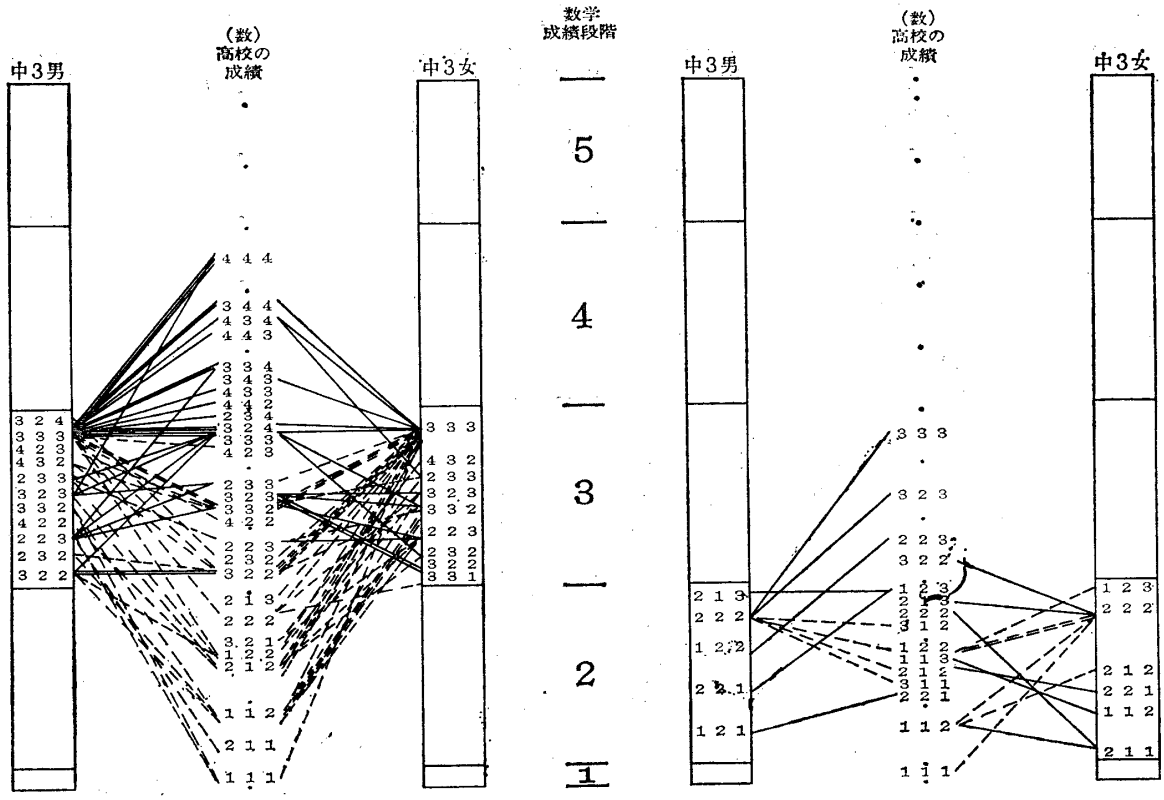

中1男
(数)
高校の
成績
中1女
数学
成績段階
5
4
3
2
1
555
545
445
544
444
534
344
434
443
334
433
432
334
324
423
333
323
332
322
223
232
213
222
122
212
112
111
434
334
333
233
232
332
223
322
123
222
213
312
321
122
212
112
211
111

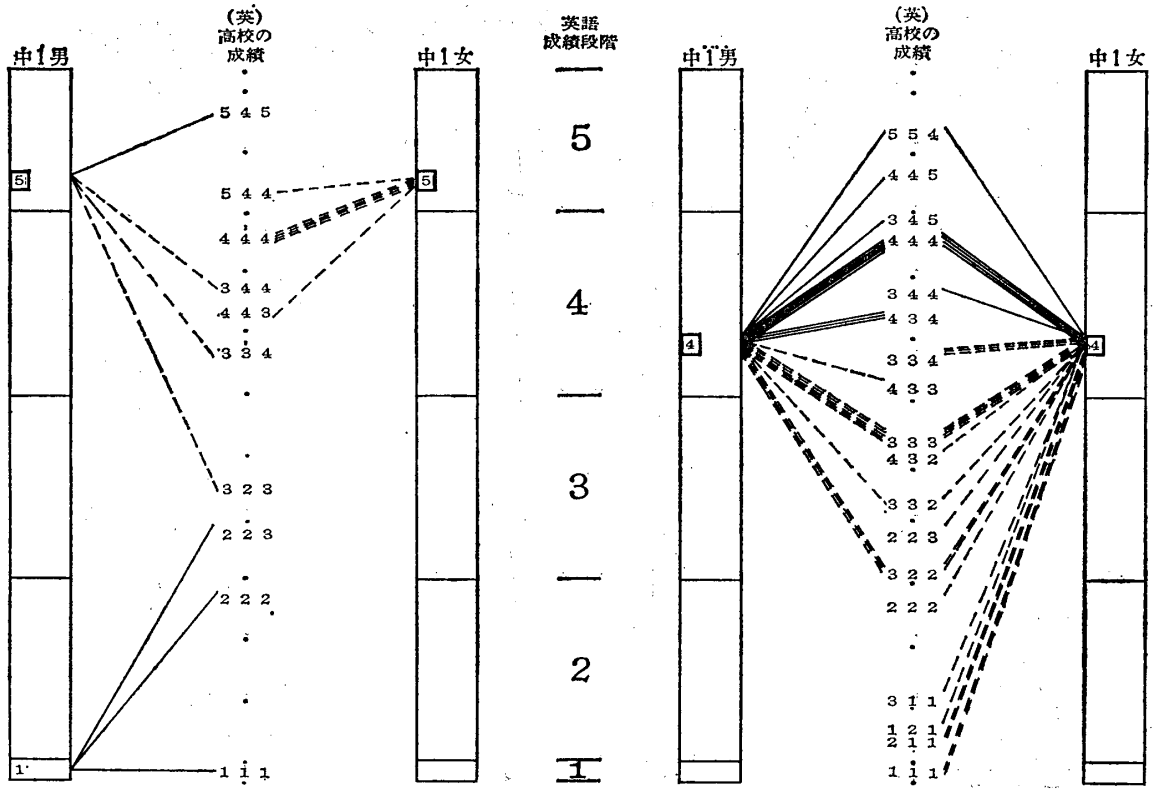

中2男
（数）
高校の
成績
中2女
数学
成績段階
5
4
3
2
1
5 4
4 5 5
4 3 3
1 1 3
1 1
4 4
3 4
4 3
5 5 5
5 4 5
4 4 5
4 5 4
5 4 4
4 4 4
5 3 4
3 4 4
4 4 3
4 3 4
5 4 2
3 3 4
4 3 3
5 3 2
3 3 3
4 2 3
4 3 2
3 2 3
3 3 2
2 2 3
3 2 2
3 1 2
3 2 1
4 4
3 4
4 3

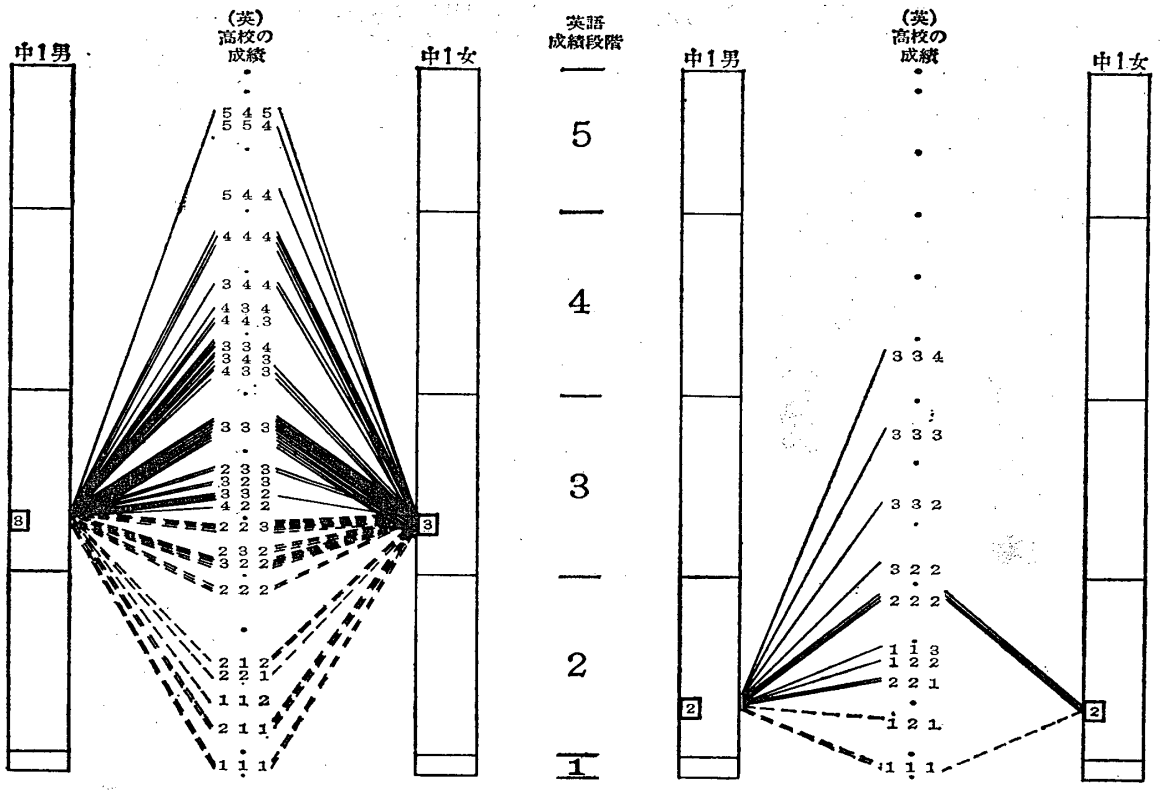

中2男
（数）
高校の
成績
中2女
数学
成績段階
5
4
3
2
1
4 2
3 3
2 3
3 2
5 4 5
4 4 4
3 4 4
4 3 4
4 4 3
3 3 4
3 4 3
4 3 3
4 4 2
3 2 4
2 3 4
3 3 3
4 2 3
2 3 3
3 2 3
3 3 2
4 2 2
2 2 3
2 3 2
3 2 2
2 1 3
2 2 2
1 2 2
2 1 2
1 1 2
1 1 1
3 3
2 3
3 2
3 3 4
3 3 3
2 3 3
3 2 3
3 3 2
2 2 3
3 2 2
2 1 3
1 2 3
2 2 2
3 1 2
3 2 1
1 2 2
2 1 2
2 2 1
3 1 1
1 1 2
2 1 1
1 1 1
2 2
1 2
2 1

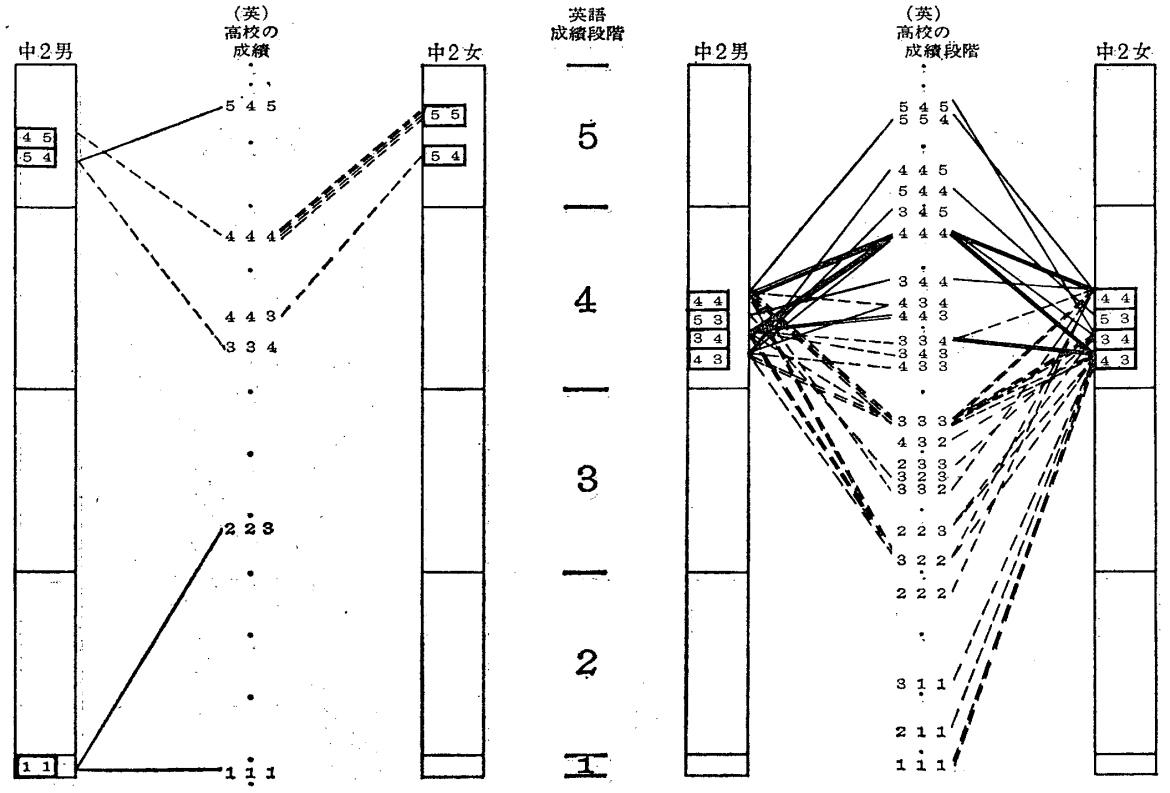
附中から附高への6か年の学習成績変化の追跡（その5）

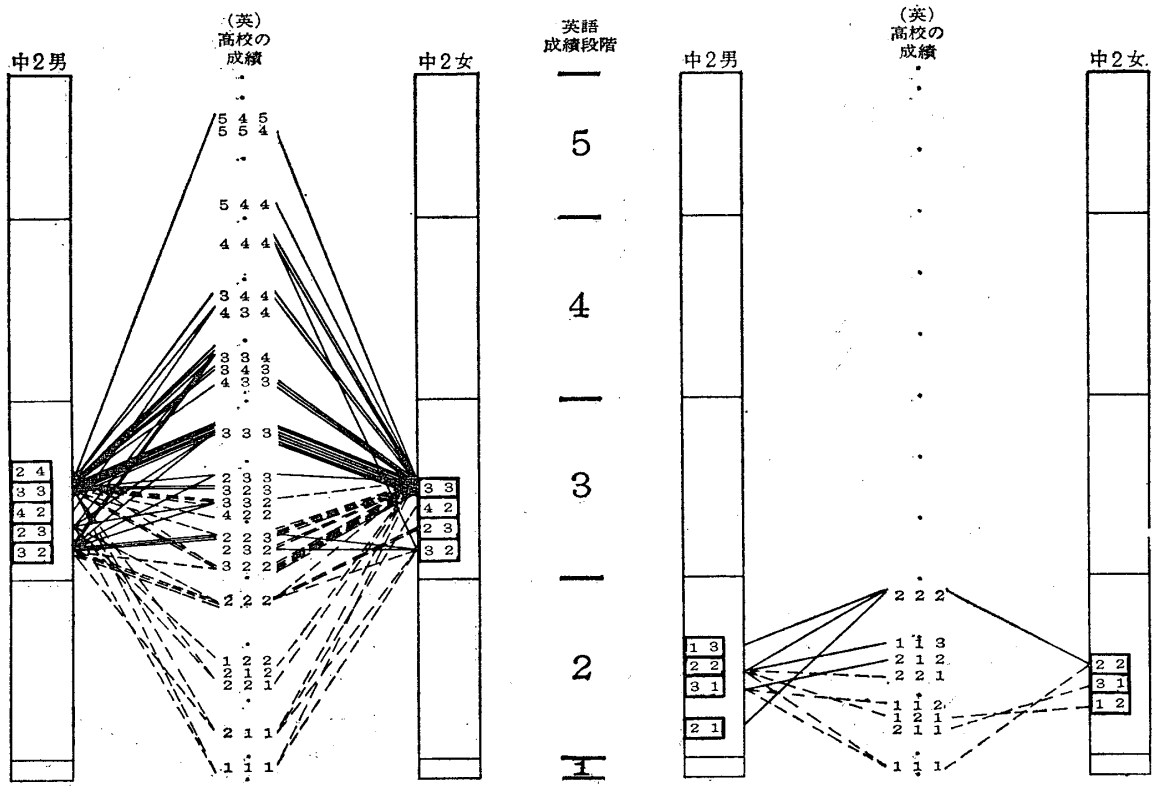


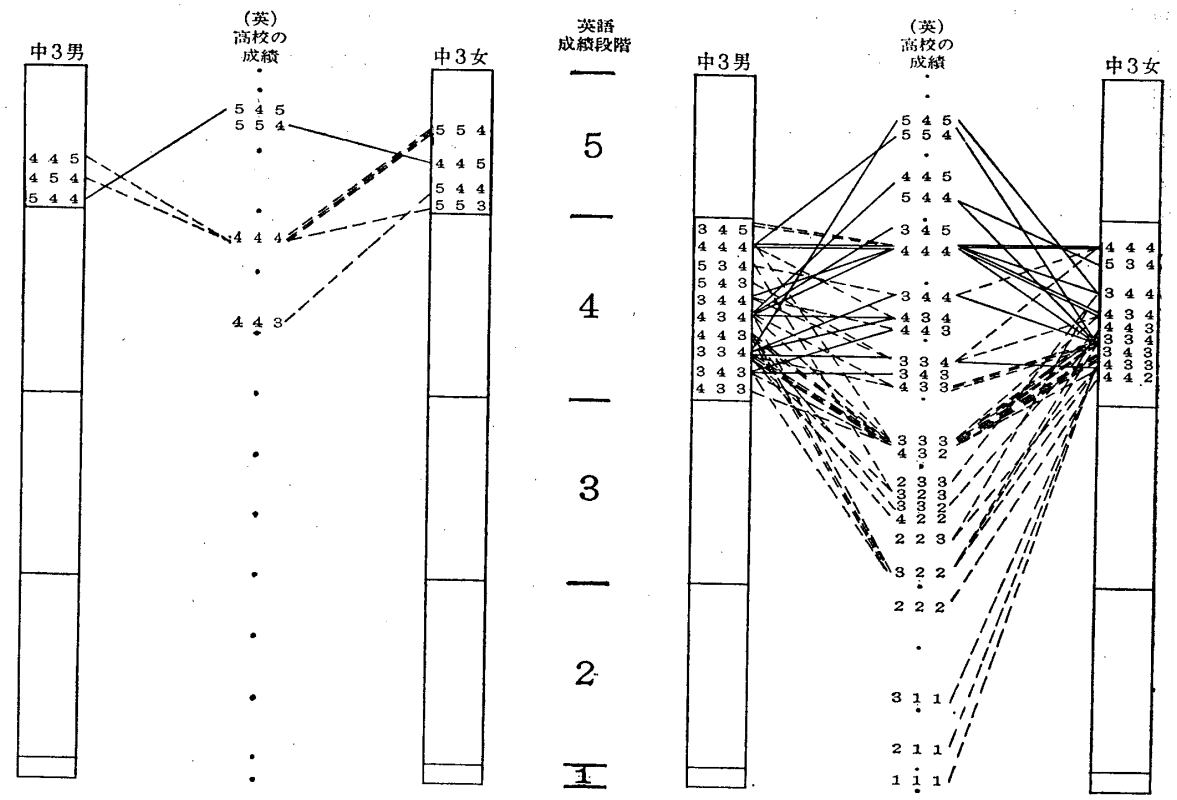


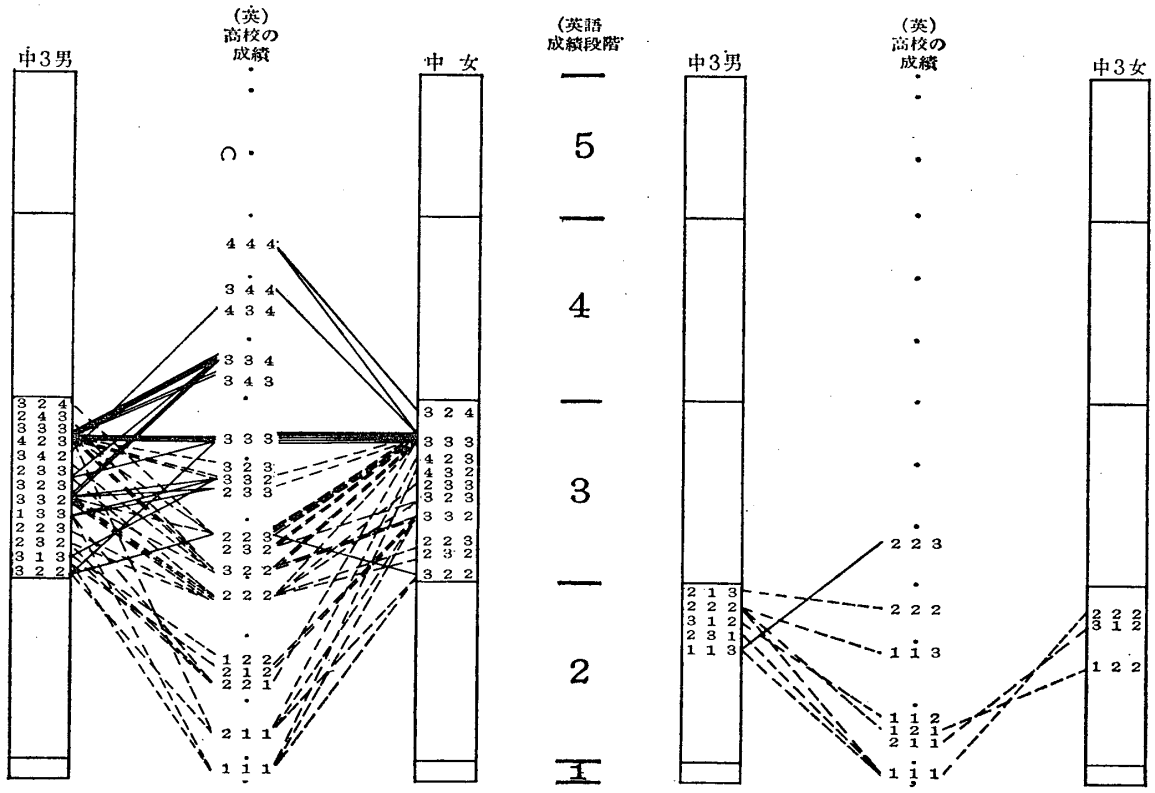

中1男
(英)
高校の
成績
中1女
英語
成績段階
5
4
3
2
1


中1男
(英)
高校の
成績
中1女
英語
成績段階
5
4
3
2
1


中2男
(英)
高校の
成績
中2女
英語
成績段階
5
4
3
2
1
中2男
(英)
高校の
成績段階
中2女


中2男
(英)
高校の
成績
中2女
英語
成績段階
5
4
3
2
1
中2男
(英)
高校の
成績
中2女


中3男
(英)
高校の
成績
中3女
英語
成績段階
5
4
3
2
1


中3男
(英)
高校の
成績
中 女
(英語
成績段階
5
4
3
2
1

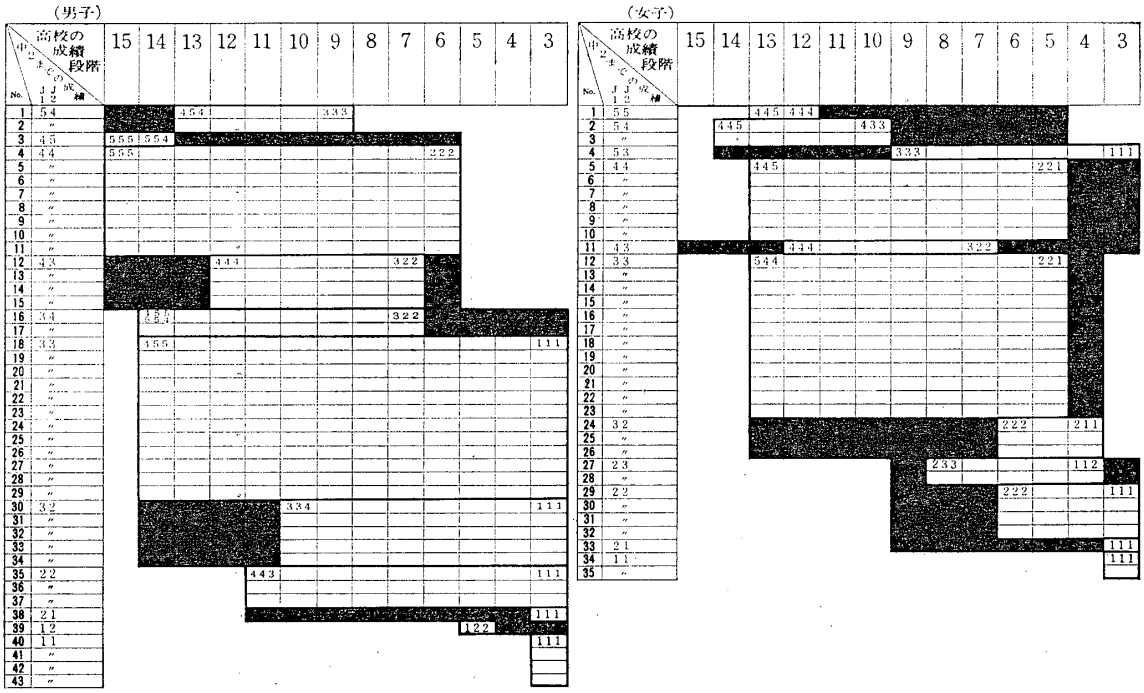
図表についての付記

数学および英語の中・高の学習成績関連図表については，昨年度の第4報に全科について述べたのと同様に興味ある，そして時としては，空恐ろしくさえ感じられるような，教科特有の傾向を見てとることができる。細部にわたってまでの比較を述べる余地は許されないので，特に著しいものだけを挙げると，

(1) 中学の各成績段階の者が高校で示す成績段階の幅に関連して

- 英・数ともに3，4の段階については学年差がほとんどない。換言すれば中1で決る。
- しかし，上昇の傾向を示す者の数は，英語では，男女差が認められないのに対し，数学では圧倒的に男子が多い。
- 2の段階については，英においては中1では向上の傾向を示す者の数が圧倒的であるのに対し，中2でも2である者は以後2の段階止りとなる。それに対して，数学では上昇の幅こそ学年進行と共に次第に狭められが，中3で2であった者も，尚それ以後上昇の傾向を示す者が半数くらいはある。
- 高校で5の段階になる者は，英数ともに中1で5であった者の中からは，むしろ例外的。
- 高校で5の段階になる者は，英語の場合は，中2で4または3の段階に在った者が主体となる。それに対し，数学の場合は，中1で4または3の段階に，中2で4の段階に在った者が主体となる。ただし，この傾向は男子についてのみ顕著に見られる。

(2) 極めて少数の例外を除き，各学年の各成績段階において，中学よりも高校の成績が上昇の傾向を示す者の数の比率は，常に女子よりも男子の方が優位にあり，伸び幅も男子の方が一般に大きい。

それから，この頁の下部の図表は，夏休みを迎えた段階で，上記の様に，中学2年は，将来の成績の大枠が決定される重大な時期であるから，自分で自分の芽をつみ取ってしまうようなことをしないようにとの警告・自省の資料として保護者に説明して渡したものである。図中，黒っぽい網目で示した範囲が，中1の段階では存在していた可能性（右寄りの部分については危険性）が，中2修了時にも，第1学期と同様の成績であった場合には，切り棄てられる（右寄りの部分については危険性を脱却できる）ことを示したものである。この指導用の図表は，第4報の関連図表に，現在の中2の生徒達の成績を対応させて作成したものである。

高校での成績の可能性領域の推定〔全科〕
（中2修了時の成績が、もし第1学期通りであった場合）